

日本も元気にする 青年海外協力隊

兵庫編

国際貢献で培われた力をいざ、兵庫で

世界を
元気にした人は、
日本も
元気にできる！

青年海外協力隊

検索



<http://www.jica.go.jp/volunteer>

独立行政法人 国際協力機構 (JICA) 関西国際センター

〒651-0073 兵庫県神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2

Tel: 078-261-0341 (代) Fax: 078-261-0357



日本も元気にする
青年海外協力隊

兵庫編

国際貢献で培われた力をいざ、兵庫で

世界を
元気にした人は、
日本も
元気にできる!



その経験を兵庫で活かし

地球の裏側で、現地の人々と共に過ごし
地域に根ざした活動をしてきた青年海外協力隊。
兵庫県の各地で働く、協力隊OB・OGを訪ねた。

国際貢献の活動は、たやすくはない。
壁にぶつかれば、自ら知恵を絞り、自ら動く。
小さな行動の積み重ねが、周囲の信頼を得て、
困難な状況を打開することを、彼らは体得している。

その経験を活かし、兵庫県で直面する仕事に
彼らは真摯に向き合っている。
各地で活躍する8名の協力隊OB・OGの雄姿を
ぜひ、ご覧ください。



その経験を日本の未来へつなげる



スポーツを通して育む
地域のつながり、心の健やかさ。

柏木 真紀さん

赴任地
ザンビア

兵庫県神戸市
兵庫県教育委員会事務局
スポーツ振興課 指導主事



地域のシンクタンクで
経済振興に貢献できる調査を。

朱山 真也さん

赴任地
ネパール

兵庫県姫路市
姫路商工会議所内 姫路経済研究所
研究員



高校生にこそ伝えていきたい
自ら挑戦していくことの尊さ。

齊藤 健太郎さん

赴任地
タンザニア

兵庫県神戸市
兵庫県立東灘高等学校 教員

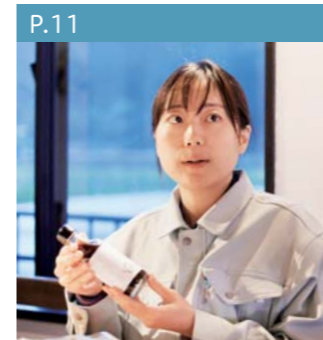


制約あるなかでできる限り
難民や認定申請者等を支えていく。

山岡 みゆきさん

赴任地
タンザニア

兵庫県神戸市
公益財団法人アジア福祉教育財団
難民事業本部 関西支部 総務業務係



地域の農業現場から
日本の農業を元気にしたい。

平野 温子さん

赴任地
ウガンダ

兵庫県朝来市
兵庫県但馬県民局 朝来農林振興事務所
朝来農業改良普及センター



急性期病棟の看護師として
臨床の現場で全力を尽くす。

井上 美希さん

赴任地
エクアドル

兵庫県養父市
公立八鹿病院 看護部



2020年東京パラリンピックに向け
障がい者水泳選手の道筋をつくる。

酒井 正人さん

赴任地
中華人民共和国

兵庫県神戸市
一般社団法人日本身体障がい者水泳連盟
アスリートパスウェイ・コーディネーター



外国人選手が活躍できるよう
言葉はもちろん、心も支える。

橘 佳祐さん

赴任地
コロンビア

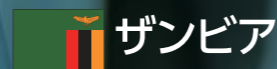
兵庫県西宮市
株式会社阪神タイガース
球団本部 チーム運営 通訳

スポーツを通して育む 地域のつながり、心の健やかさ。



柏木 真紀
MAKI KASHIWAGI

赴任地



赴任地での職種(活動分野)
体育

兵庫県神戸市
兵庫県教育委員会事務局
スポーツ振興課 指導主事

大学卒業後、兵庫県に入職し、体育教員として県立高校で指導にあたる。教員生活12年目に決断し、青年海外協力隊の現職教員特別参加制度を使ってザンビアへ。帰国後は県立高校で1年間勤務し、その後、兵庫県教育委員会事務局の長期研修生となり、指導主事試験を受験。2012年より兵庫県教育委員会事務局に勤務する。

世代を超えて人をつなぐ、地域のスポーツクラブを推進。

兵庫県は全国に先駆けて、「スポーツクラブ21ひょうご」という総合型地域スポーツクラブを育成してきた。県内の各小学校区に1つ、現在は800近くのクラブが運営されている。このスポーツクラブは、いわゆるトレーニングマシンなどを利用する施設や学校の部活動とは違い、生涯にわたりスポーツを楽しめるよう、その地域の人なら誰でも、身近に、複数のスポーツを楽しめることをねらいとする自主運営クラブ。その県の事務局を担当しているのが、兵庫県教育委員会事務局スポーツ振興課の柏木真紀さんだ。各地域のクラブ代表者たちと連絡協議会などで

話し合い、運営のサポートやローカル大会の開催などを推進している。「クラブの代表者の方や、協議会の会長さんに助けてもらって、事業を進めることができます」と柏木さん。それまで、教員という立場で生徒に指導するのが主だった柏木さんだが、現在は、地域の第一線で活躍するクラブ代表者たちと協議し、スポーツ庁や日本体育協会などと連絡調整をする事が多い。「最初は相手にどう伝えたいのか戸惑いましたが、協力隊の経験から、私のなかで人との距離感が変わりました。今では立場や職業、年齢を問わず、会話を進めることができるようになりました。」



生涯スポーツのすそ野を広げるため、兵庫県では「ひょうご de スポーツ推進月間」を設置。毎年10月に行う街頭キャンペーンの様子。



「関西ワールドマスターズゲームズ2021」の各競技の開催地を知らせるポスターを掲示する。「日本スポーツマスターズ2017」は兵庫県で開催。

教育現場から教育委員会へ より広い視点をもつために。

13年間の教員生活を経て、柏木さんが学校を離れると告げた時、周囲はとても驚いたそうだ。「私自身も定年まで学校現場で働くつもりでした。でも、協力隊に参加してザンビアの教育現場を見てからは、日本の教育についても社会における広い視点で見たいと思うようになりました。次世代を担う子どもたちをどう育てていくかは、私たち大人の課題。今は、子どもたちが育つ地域社会にスポーツ振興を通して関わることができますので、うれしく思っています」。

地域を越え、国を越えて スポーツ大会で心も育む。

兵庫県では、スポーツのメガ大会の開催が目白押しだ。「日本スポーツマスターズ2017兵庫大会」を皮切りに、開催都市に神戸市が入る「ラグビーワールドカップ2019」、「関西ワールドマスターズゲームズ2021」もある。マスターズとは、日本では30歳以上の愛好者を対象とした生涯スポーツ大会のこと。柏木さんは、「点と点だった地域のスポーツクラブが、こうした大会によって意識が高まり、全国、そして世界でつながる可能性もあるでしょう」と期待を膨らませる。

スポーツ振興課では、それらの大会の準備運営にあたり、国内外から訪れる選手たちを迎え入れる。「世界大会ではもしかしたら、ザンビアの人たちが来るかもしれません。そうしたら、心から応援したい。私の第2の故郷ですから」と柏木さんはほほ笑んだ。

上司に
聞く!



兵庫県教育委員会事務局 スポーツ振興課 副課長 川崎 芳徳さん

柏木さんはバイタリティがあります。誰とでも臆することなく接し、会議などでは謙虚な姿勢で挑みつつ、こちらの計画を実現する。素晴らしい交渉術です。協力隊での経験から培われたのでしょうか。職場ではワークライフバランスがいいと評判です。その点は我々も見習わなければならないところ。将来の活躍も楽しみです。

日本の教育水準の高さと美德を 改めて感じる機会となった。

「赴任地ザンビアの人たちは陽気でおおらか。苦勞もありましたが、楽しい思い出が勝ります」と柏木さん。活動は、教員養成大学の体育教員として座学と実技、部活動の指導などを行った。「英語で授業をする以外は、日本の大学あまりと変わりません。ですが、寄付や援助に慣れてしまって、彼らが自主的に何かを変えて行動していくには時間がかかると思いました」。

そして帰国後、兵庫県立加古川東高校での最初の授業が今も忘れられないという。生徒たちが体操服を着て時間通りに体育館に並んでいたことに、柏木さんは感極まった。「ザンビアでは学生が運動着で時間通りに並んで待っていることはまずありません。

日本では当たり前のことなのですが、日本の教育水準の高さと日本人のもつ美德に感動してしまって…。思いおこせば、協力隊へ参加すると決めた時、柏木さんの背中を押してくれた生徒たちがいたそう。次世代の応援を胸に、協力隊での経験を糧に、柏木さんは前に進んでいる。



生徒集会所を体育館代わりに実技の授業を行った。



オフィスでの様子。



大学なので、栄養学や解剖学も教えた。

青年海外協力隊を目指すみなさんへ

挑戦できることに感謝して 思い切ってやってほしい。

協力隊に参加しようかと悩んでいるあなたは、その時点で国際貢献に興味があって、挑戦できる舞台に立っているのです。素晴らしいことです。参加してマイナスになることはありません。目の前の1年、2年のキャリアだけではなく、人生を長い目でみつめることも必要なのではないでしょうか。思い切って、行って来てください。

地域のシンクタンクで 経済振興に貢献できる調査を。



朱山 真也
SHINYA SHUYAMA

赴任地



赴任地での職種(活動分野)
マーケティング

兵庫県姫路市
姫路商工会議所内
姫路経済研究所 研究員

大学卒業後、姫路信用金庫に入社。渉外係として約7年間勤務後、協力隊へ。赴任地のネパールでは、配属先が実施した職業訓練のモニタリング等を実施。2016年6月帰国。同年10月に創設された姫路経済研究所へ勤務先の姫路信用金庫から出向。研究員として地域経済に関する人口の基礎調査やデータ分析などを行っている。

帰国後は新たな業務に迷わず「やります」と返事。

姫路経済研究所は、2016年10月に設立された市内初のシンクタンクだ。姫路商工会議所の内部組織でもあるこの研究所に、朱山真也さんは姫路信用金庫から出向している。ここで朱山さんは、地域経済に関わる人口減少などの基礎データを作成している。

中小企業や地域経済においても、海外との取引やグローバル化は進んできている。「ここ姫路でもますます、国際関係の事業は増えていくでしょう。自分は青年海外協力隊に参加し、国際貢献の活動がそれほど甘くないという現実と直面しました。いつかリベンジしたい

と思っていますが、まずは国際関係分野で地域の力になれるように研究員として知識や経験を積んでいきたい」と朱山さんは言う。

姫路信用金庫では、渉外係として地元企業を支え、企業からも信頼されていた。だが、協力隊の活動後は新たな業務に就いた。「一から何かを始めるという点では、協力隊の活動と似ているかもしれませんが、この仕事も、いずれは姫路市、そして播磨地域の経済発展に貢献できると考えています」。



統計資料などから、姫路や播磨地域に必要なデータを集める。



地域のシンクタンクとして、いずれは県や国に発信する地域のデータも作成していく予定だ。

甘くない途上国での経験、 自分自身との対峙。

朱山さんが協力隊を目指そうと考えたのは、30歳を前に悩み始めた28歳の時。学生時代に憧れていた協力隊の活動を思い出し、「社会人としての実務経験を生かして何かできないか」と夢を抱いて応募した。赴任地のネパールでは、産業省の外郭団体に配属になった。職業訓練の実態調査と改善点の提案を求められていたはずだが、行ってみると具体的な要望もなく、配属先の所長ともソリが合わず険悪な関係に…。予想外の現実と直面するなか、自分と向き合う時間ももち、自己マネジメントの重要性に改めて気づいたという。そして、地道に人間関係を構築していくことの大切さも知る。「協力隊の活動で実感したこと1つに、待ちの姿勢でいてはいけないと学びました」と朱山さん。着地点が見えないなか、まずは自分を変えること、周囲の人々に働きかけることから活動をスタートさせた。

挑戦し続けることで 新たな道も開ける。

とはいえ、2年間も職場を離れるというブランクは、企業社会でのハンデにならないのだろうか。「正直、不安もありました。それに、協力隊の活動は今の仕事に直接的に役立つことはありません。ですが、何かに挑戦し続けることで道を拓くことができ、次のステップにつながっていくのではないのでしょうか」。おだやかな口調の奥にたくましが光る朱山さん。新しい業務での挑戦は、始まったばかりだ。

上司に
聞く!



姫路信用金庫 事業支援部 事業支援グループ 部長 尾崎 史朗さん

青年海外協力隊への現職派遣は、社内でも初めてです。朱山さんは入社後、外回りの渉外担当として勤務してきたまじめなタイプ。ネパールでの活動を終えた今は、頼もしさも加わりました。今後は、取引先企業の海外展開も増えますので、海外での人脈やネットワークづくりの経験を、地域経済の活性化に還元してほしいです。

地域で産業をうむため モノづくりや市場開設を提案。

アジア最貧国の1つといわれるネパールでは、海外への出稼ぎが収入の大半を占めている。経済的な弱さを脱するためにも、地域で産業を生み出せる環境やシステムづくりが必要だと朱山さんは考えた。そこで、青空市場を開催する準備をしたり、ネパール語のデザインを生かした新聞エコバッグの制作指導とその事業化なども提案した。「僕が帰国した後、どこまで続けてくれているか…」と今も心配している。

さらに、活動中の2015年にネパール地震が発生。別の配属先の先輩隊員とともに日本から義援金を募り、現地の赤十字に送金。義援金で救急箱を購入し、学校保健のない小中学校に設置した。「経済や教育水準

は遅れています。でも、冬の寒い時期に日向ぼっこをしながら、職場のみんなで地元産のみかんを食べる。そんなのどかな時間もありました」。ネパールのあたたかな思い出が、朱山さんの心に刻まれている。



ネパール地震後に地元赤十字社と協力して、救急セット配布プログラムを実施。



同任地隊員と現地の小学校児童と共同で行った清掃活動。

青年海外協力隊を目指すみなさんへ

大変なことも多い。
だから活動を精一杯楽しんで。

せっかく「行きたい」と思って協力隊を目指すのであれば、精一杯楽しんでください。現地では予想以上に大変なことも多い。だからこそ、その大変さも含めて「精一杯」です。全力で楽しむことで大変な活動にも取り組むことができますし、全力で楽しむことで人と人の関わり合いもいっしょに築いていくことができるでしょう。



新聞エコバッグの作り方を指導。

高校生にこそ伝えていきたい 自ら挑戦していくことの尊さ。

$$= -2$$

$$= -2 \log_2 2$$

$$= \log_2 2^{-2}$$



齊藤 健太郎

KENTARO SAITO

赴任地



赴任地での職種(活動分野)
理数科教師

兵庫県神戸市
兵庫県立東灘高等学校
教員

大学卒業後、兵庫県に入職。兵庫県立尼崎高校の数学科の教員として4年間勤務。青年海外協力隊に応募し、現職教員特別参加制度を利用してタンザニアへ。赴任地の公立中学校で教員として2年間活動。帰国後、赴任前の高校で2年間勤務し、2016年4月より兵庫県立東灘高校の教員として勤務する。

生徒たちの数学の苦手意識を取り除き、部活動も推進。

齊藤健太郎さんは、兵庫県立東灘高校で教壇に立つ数学科の教員だ。海風も感じられる神戸市深江浜町にある高校を訪ねると、元気な声で挨拶をする生徒たちに囲まれて、齊藤さんは笑顔で迎えてくれた。

東灘高校の生徒たちの進路は、大学、短期大学、専門学校の受験から就職まで幅広く、教員の進路指導も多岐にわたる。齊藤さんは、こうした生徒たちに、どちらかと言えば敬遠されがちな数学を教えている。現在担当するのは高校2年生。分かりやすさを心がけ、希望者には補習時間を設けるなどの細やかな指導を続けている。その結果、それまで数学

を苦手としていた生徒から、「先生、分かった」「解けた」という言葉を聞くことができると何よりうれしいう。「教師冥利につきます」と齊藤さん。

また、齊藤さんはバスケットボール部の顧問もしている。部活動加入率がやや低い同校において、可能な範囲で部活動を勧めていきたい、成長期であり多感な時期だからこそ仲間と一緒に汗を流してほしいという。「そして、目指すのは言われてやる部活動でなく、自主的にやる部活動」。齊藤さんは、心の成長においても部活動をやることに意味があると、生徒たちに伝えていきたいそうだ。



生徒たちの目線に立って教える。日本でもタンザニアでも共通して大事にしていることだという。



バスケットボール部の顧問も務める。今回の取材中も、終始、生徒たちから賑やかな声がかけていた。

現地の感覚から学んだ 心のゆとり。

齊藤さんの赴任地タンザニアの地方都市ムタマでは、電気の通じている家と通じていない家、ノートを持っている生徒と持っていない生徒など貧富の差はかなりあった。「それでも、貧しいことについて、本人が卑屈になることはありません。明るく暮らしているのが印象的でした」と齊藤さん。そして、タンザニアのポレポレという感覚には驚いたという。「これは、ゆっくりゆっくりという意味で、『急ぐ人に幸せはやってこない』という言い伝えもあるくらいです」と話す。約束しても待ち合わせに来ない、バスは遅れる…。時間通りに進まないポレポレの感覚に戸惑い、苛立った齊藤さん。この点はかなり我慢をしたそうだ。だが、時間が経つうちに気持ちが和らぎ、受け止めることができた

未知の経験に自ら挑戦、 選んだのが協力隊の活動。

齊藤さんが協力隊に参加しようと考えたのには、理由があった。4年間の教員生活を経て、「生徒たちに日頃、いろんなことに挑戦してみようと話している割には、自分が挑戦していないことに気づきました。自分には何ができるかと考えた時に、教員での指導経験を生かして青年海外協力隊に参加することに辿り着きました。教員を続けていく上でも、自分の経験として生徒たちに伝えることができると思ったのです」。

日本では成し得ない経験が 大きな自信につながった。

赴任地のタンザニアで齊藤さんは、生徒たちのおかれた環境や状況に驚いたそうだ。生徒たちにとって、学校の授業よりも大切なものがあつた。雨が降ったら水を汲みに行く、時期によっては農作業の手伝いをする。それらは、生きていくために大切なことだった。「現地では当たり前のことですが、日本においては分からないことでした」。

協力隊での活動を「日本では成し得ない経験」と齊藤さんは語る。スワヒリ語が話せないなかでのコミュニケーション、水や電気がない生活、それらに慣れなければ生活も活動もできない。日本においては経験できないことばかりだ。「精神的にも鍛えられました。これからは、世界中どの国でも数学を教えることができます」。その言葉を支えているのは、自ら挑戦して得たかけがえのない経験なのだろう。

上司に
聞く!



兵庫県立東灘高校 校長 青山 哲也さん

齊藤先生は、本校に着任して間もないのですが、生徒にきちんと関わっているようです。規律等で厳しく指導し、生徒一人ひとりの事情を理解した上での対応もできる。つまり、単に優しいだけではないプロの教員です。そこには、協力隊での経験も生かされているのでしょう。いずれは、本校の中核となって動いてくれると期待しています。



質問に来た生徒に、机を外に出して青空教室で個人指導もした。



授業終了後の生徒たちと記念撮影。日本の中学校にあたる年齢だ。

青年海外協力隊を目指すみなさんへ

協力隊に参加することは それだけで大きな挑戦です。

協力隊に参加することは、誰にとっても大きな挑戦です。現地でも、その「チャレンジ精神」を最大限に生かしてください。2年間というのは案外短いので、思ったことをどんどんやってみることで。協力隊での経験が直接ではなくても、いずれ、生きてくることもあるかもしれない。僕自身、参加して本当に良かったと思っています。



ムタマセカンダリースクールの数学の授業。古い黒板に苦労しながら板書する。

制約あるなかでできる限り 難民や認定申請者等を支えていく。



山岡みゆき
MIYUKI YAMAOKA

赴任地



タンザニア

赴任地での職種(活動分野)
村落開発普及員

兵庫県神戸市
公益財団法人アジア福祉教育財団
難民事業本部 関西支部 総務業務係

大学卒業後、民間企業に勤務を経て、イギリスのイースト・アングリア大学大学院修士課程に進学し、国際社会開発を修了。卒業後は青年海外協力隊に。2012年、公益財団法人アジア福祉教育財団関西支部で難民相談員として勤務。2014年より同支部で支援事業のマネジメント業務、広報・啓発業務にあたる。

どこか遠い国の話ではなく「私たち」の難民問題に。

世界人口約73億人のうち約6,500万人、およそ113人に1人が難民だ。日本には約1万2,000人の難民を受け入れているが、そのことが日本社会で広く知られているとは言い難く、難民問題は「どこか遠い国の話」になっている。難民とその家族、難民認定申請者への支援事業を政府から委託され実施しているのが公益財団法人アジア福祉教育財団難民事業本部であり、この関西支部に山岡みゆきさんは勤務している。山岡さんは、「日本に移住する難民にもっと関心を持ってほしい」と話す。山岡さんは最初、難民相談員として世界中から来日した難民やその家族、難民申請者等と直接、面談などで

対応していた。「難民認定の審査には時間がかかります。その間に受けられる公的支援に限られるなか、外務省より委託を受け、経済的に困窮している難民認定申請者に、生活費、住居費、医療費の支援を行っています」。日本とは異なる考えをもつ支援対象者たちに対して、大抵のことで動じることがなかったのは、青年海外協力隊での経験によるものだという。現在は、その難民相談員を統括する立場となり、管理業務を任されている。「相手の言い分を汲みながら、目的の方向に進めるというコミュニケーションは、協力隊での経験も大いに役立っています」。



難民問題を考えるセミナーで司会を務める山岡さん。広報活動も大切な仕事。



電話対応なども迅速にこなしていく。笑顔を心がけているのは、どんな時にも笑って過ごすタンザニア人から学んだことだ。

イギリスの大学院在学中に感じた 圧倒的な現場経験の差。

山岡さんは大学卒業後、民間企業に勤務したが、一念発起して海外の大学院進学を目指すことに。「あの時はかなり覚悟をしました。周囲に自分の目標を伝えて、自分を追い込んで…」と振り返る。苦手な英語も必死に取り組み、イギリスのイースト・アングリア大学に進学。大学院で国際社会が掲げるMDGsなど国際社会開発学を研究した。「在学中に感じたのは、同級生との現場経験の差でした」。同級生には、国際機関の勤務経験者や政治家、国際ボランティア経験者などいて、自らの経験をもとに意見を交わす。もどかしさを感じた山岡さんは、修了後、協力隊の活動を選んだ。

支援する人々に 来日した良さを感じてほしい。

赴任地のタンザニアでは、村落開発普及員として地域開発訓練校に配属された。それまでは、現地に馴染み、現地の習慣を尊重することも大切だと考えていたが、日本人から見た「違う」ということも伝えるべきだと実感したそうだ。時間はかかったが、周囲の意識の変化に手応えを感じたと話す。そんな経験から、「今の仕事では、できること、できないことを相手にはっきりと伝えなくてはなりません。厳しい制約もあるのですが、支援している人たちに少しでも『日本に来て良かった』と感じてもらいたいです」。優しさがあふれる山岡さん。熱い思いで今日も業務を進めている。

上司に
聞く!



公益財団法人アジア福祉教育財団 難民事業本部 関西支部長代行 中尾 秀一さん

小さな所帯ですので、即戦力となる人材が必要です。そんな時、現場に出て活動している協力隊の経験は、力になってくれると期待できます。我々の仕事は外務省の委託業務で制約も多い。そのような中、山岡さんは困って訪れる人の状況を的確に判断し、スピーディに対応できる。彼女には安心してマネジメントを任せられます。

現地に馴染むだけでなく 怯まずに変化を促す勇気をもてた。

赴任地のタンザニアで山岡さんは、地方公務員を養成する地域開発訓練校に勤務した。校内ではICTの授業等を担当し、郊外では村落の女性を対象とした青空教室の運営を補助。通電していない環境下で、授業の大半は模造紙にキーボードの絵を描き、手作りのテキストにエクセルやワードの操作画面のスクリーンショットを張り付けて授業を行ったそうだ。

だが、他の教員が授業を行わないことも多く、山岡さんは悩んだ。授業が進まない、受講生たちは政府の試験をパスできない。現地ではこれが普通だというが、普通でないことをどう伝えるべきか…。考えた末、山岡さんは、「なぜあなたは授業をしないのか」と

さぼる教員に訊ねていった。最初は笑って済ませるだけだった教員たちも次第に声をかけ合い、定刻に教室に行く姿も増えていった。「私が本当にこの国の人に貢献したいと思うからこそ、『それは違う』と勇気をもって伝えることも必要だと思いました」。



他の隊員と合同で行った村での講座では「栄養素」を担当。栄養素が身体のどんな機能に影響を与えるか説明し、バランスのよい食事を心がけるように訴えた。



乳幼児を抱えながら参加してくれる受講者もいた。



校外にて女性への啓蒙活動を行う様子。

青年海外協力隊を目指すみなさんへ

思いと現実にはギャップがある。 だからこそ、貴重な経験。

「助けたい」と大志を抱いて挑んでも、現地のモチベーションの低さにショックを受けるかもしれません。でもそれは「現場」だから。そのこと自体、貴重な経験なのです。また、何か失うものがあっても、別の何かを得られるはず。私は、協力隊に参加できたことを人生における幸運と考えています。あなたにも幸運となりますように。

地域の農業現場から 日本の農業を元気にしたい。



平野 温子
HARUKO HIRANO

赴任地



赴任地での職種(活動分野)
病虫害対策

兵庫県朝来市
兵庫県但馬県民局
朝来農林振興事務所
朝来農業改良普及センター

大学院修士課程(植物病原学)修了後、青年海外協力隊に参加し、ウガンダへ。帰国後の2016年4月、兵庫県に入庁。但馬県民局朝来農業改良普及センターに配属。同センター管轄地域の朝来市と養父市で栽培される野菜を担当し、技術支援を行っている。

県職員の道を選んだのは地域に入って農業に関われるから。

2016年4月、兵庫県但馬県民局の朝来農業改良普及センターに配属された平野温子さん。平野さんは、管内の朝来市、養父市の生産者に情報提供や技術指導を行い、農家の栽培技術や経営向上の支援をする職員だ。担当するのは、朝来市特産品の「岩津ねぎ」のほか、ホウレンソウ、ダイコン、イチゴなどの野菜類。平野さんが県の職員となったのは、「日本の農業に地域から関わっていきけるから」と話す。そのきっかけとなったのが、青年海外協力隊での活動だったという。植物病原学を専攻し、開発途上国のイネウイルスについて研究していた平野さんは、現場の問題を自分の

目で確かめたいと、協力隊に参加した。赴任地のウガンダでは、稲作の病虫害調査や稲作普及活動に取り組んだ。「ウガンダと日本では技術的に差はありますが、農業や生産者に対する基本的なアプローチは変わらないのではないかと感じたのです」。そう語る平野さんには、現地での貴重な経験があった。それは、稲作研修を受講した生産者に高付加価値米としてコシヒカリの栽培を提案し、首都の日本食レストランへ販売を試みたことだ。レストラン側に彼の栽培能力の高さを伝え、両者の信頼関係を少しずつ築き上げ、最終的には契約栽培と初期投資の援助につなげることができたのだ。



営農体験研修でお世話になった養父市の上垣康成さんを訪ねる。「あいも農法」で稲作をする上垣さんは、育った合鴨を食肉として販売するなどユニークな経営を進めている。



ねぎの生育調査。軟白部、葉身部の長さを測る。

課題はいつも現場に。 だから現場での経験を積む。



現在平野さんは、岩津ねぎの生産拡大に向けた取り組みを行っている。岩津ねぎは博多万能ねぎ、群馬の下仁田ねぎと並ぶ日本の三大ねぎであり、全国のファンも少なくない。先日講師として参加した岩津ねぎ料理教室の受講者からは、「もっと岩津ねぎの良さをアピールして欲しい」という声が聞かれた。一方で岩津ねぎの生産者を訪問すると、愛情込めて一生懸命作っており、「自分達が作った美味しいねぎを、全国の消費者に届けたい」と望んでいる。「生産現場の課題を見極めて支援を行いつつ、生産者と全国の消費者の想いを繋げられるような、そんな仕事をこれからしていきたい」と平野さんは熱く語る。

協力隊に参加して 地域と自分の距離が縮まった。



協力隊の活動に参加して得たこととして、地域のことを自分のこととして考えられるようになったと平野さんは話す。「参加する前は、地域は生活の場としてしか見ていませんでした。でも、2年間の活動で地域の人たちとつながる喜びやありがたさを感じるようになりました」。平野さんは帰国後、それまであまり関心を寄せていなかった、自分が住む地域の人達の顔を覚えて、挨拶するようになったそうだ。「地域は自分たちで作るもの、変えていくものという見方ができるようになりました。これも協力隊の活動のおかげです」と平野さん。まっすぐな目線で地域を、そして日本の農業をみつめている。

先輩に
聞く!



兵庫県但馬県民局 朝来農業改良普及センター 普及主査 齊藤 浩司さん

平野さんは、初めてのことで自分から積極的に行動していますね。業務では、生産者のところへ直接出かけることも多いのですが、協力隊での経験をいかして、訪問先でもポイントを押さえて、自分なりに整理しながら取り組んでいるようです。「即戦力になってくれる」と周囲も期待しています。

「助ける」よりも「助け合う」。 相手の心を動かすために働きかけた。

平野さんは、赴任先のウガンダで病虫害対策隊員として国立作物資源研究所のイネ部門に配属。イネ害虫や天敵の発生状況等の基礎調査を行い、被害対策体制の構築等を目的に活動した。思いのほか苦労したのは、カウンターパート*との関わり方だったそうだ。「イネ病虫害の調査は自分の仕事ではない」ととらえられてしまったのだ。だが、現地の研究者が関わらなければ、平野さんの活動は意味がなくなってしまう。悩んだ末、平野さんは行動に移した。定期的に会合を設けて進捗状況等についてカウンターパートに意見をもらい、研究発表の場を設けて分野外の研究者からの外部評価も得られた。地道な努力でカウンターパートは調査に対し積極的な提案

をするようになった。

「助けるという意識ではなく、共に助け合うという意識でアプローチすることが、相手の自発性を高める上でも大切だと学びました」。



近所の小学校で行った稲バケツ栽培。稲作はまだ珍しく、興味をもって生育を見守ってくれた。



稲作研修の様子。



インターンシップで試験場に来た学生たちに、稲の病虫害調査手法(虫すくい取り手法)を教えた。

青年海外協力隊を目指すみなさんへ

かけがえのない経験がある。 まずは一步、踏み出して。

迷っているなら、参加しましょう。ボランティアという立場での活動は、実はかなりの可能性をもっています。目標に向かって様々な方法で挑戦していけるのは、協力隊だからこそ。そして、それまで知らなかった国や地域もきっと、日本の次に帰りたいと思える大切なところとなります。私にとっても、ウガンダは第2の故郷になりました。

*途上国のボランティア事業における相手国の同僚。協力隊はカウンターパートと協働して活動を行う。

急性期病棟の看護師として 臨床の現場で全力を尽くす。



井上美希
MIKI INOUE

赴任地



赴任地での職種(活動分野)
看護師

兵庫県養父市
公立八鹿病院 看護部

大学を卒業後、神戸大学病院で3年間勤務。その後、出身地である兵庫県香美町も診療範囲とする公立八鹿病院で7年間勤務する。念願叶い、青年海外協力隊の現職参加でエクアドルへ赴き、看護師として2年間活動。2016年7月に帰国し、帰国直後から赴任前と同じ5病棟に勤務する。

地域医療の最先端で、日々、住民の看護にあたる。

兵庫県但馬地方西南部にある公立八鹿病院は、病床数420床、診療科23科を数える地域中核病院だ。看護師井上美希さんが働くこの病院は、地域福祉センターを併設し、在宅患者を支援する訪問看護の拠点として、南但訪問、看護センターがあり、3カ所のサテライトも設置。訪問看護の歴史は長く、1981年に医師、看護師のボランティアで始まったという。まさに、高齢化する地域社会を支える地域医療の先駆的病院だ。井上さんが勤務する5病棟は、手術を中心とする急性期の病棟で、術前術後の対応やリハビリなど、他の部署とも

連携を図りながら看護に取り組んでいる。

青年海外協力隊への参加を希望し、エクアドルで2年間活動した井上さん。帰国後2週間もしないうちから、この緊張する病棟に復帰し、夜勤も入っている。「職場の配慮で、協力隊へ行く前に勤務していた病棟に戻ることができました。スタッフの半分は旧知のメンバーで、上司にも仲間にも恵まれて働くことができています」と井上さん。ひとたび看護の現場に出れば、厳しいまなざしで業務にあたる。その一方で、患者さんを見つめる目はどこまでも優しく、温かい。



入院患者の点滴を準備する井上さん。手術後の患者も受け入れる病棟で、看護師は1日3交代制で勤務する。



入院患者の血圧測定は1日に2回以上。ベッドサイドで患者さんと言葉を交わしながら、心の状態もチェックする。

諦めきれなかった 協力隊の現職参加希望。



病棟看護師として10年ものキャリアを持つ井上さんは、なぜ協力隊を希望したのだろうか。「看護師のスキルアップを考えた時、私は途上国の看護を学ぶことで、看護の本質が見えてくるのではないかと思ったのです。勤務する病院に協力隊の現職参加を強く希望し、許可が出た時はうれしかった」と井上さん。現職参加にこだわったのは無論、生まれ育ったこの地で看護師を続け、多くの人に看護師の働く現場は病院だけではないこと、看護は国境を超えて繋がっていることを伝えたくかったからだ。

日本人の感性や文化が光る 看護という仕事を誇りに思う。



井上さんは、協力隊での経験を次のように語る。「海外の厳しい環境で取り組んで、改めて日本の看護の質の高さを実感しました。日本で大事にしてきた患者さんに寄り添う気持ち、環境や安全安楽の援助、チーム医療などは、日本独自だったことを初めて実感しました」。看護には、その国の文化や宗教、習慣などが反映されていたのだ。視野が広がったという井上さんは今、業務の傍ら、病院併設の看護専門学校で国際看護について、協力隊での経験を熱く語っている。多くの人の支えで実現できた貴重な経験を、若い世代に伝えていきたいそうだ。

上司に
聞く!



公立八鹿病院 看護部長 足立 記代子さん

井上さんはまじめでポジティブに働いています。そして、協力隊の活動に行きたいという強い意志がありました。帰国後すぐ、職場に復帰したので、時間や言葉の感覚がもともと戻るまで大変だったと思います。彼女らしい国際協力や看護への関心は、ぜひ若い看護学生たちに伝え、そして時間をかけて地域の患者さんへ還元してほしいと思っています。

住民への指導が帰国後も継続。 2年間の活動が報われる。

エクアドルのインバプーラ県の慈善財団で、井上さんは巡回医療チームのメンバーとして活動した。離れた集落や学校へ医療を届けるのが役目だ。訪問先には車で6時間もかかる村や道なき道を3時間半も歩いて行くへき地もあった。「巡回医療チームの診療は無料。村の人々はみな、待っていました」。住民の多くは、食事の偏りから体脂肪率40%を超える肥満、高血圧、糖尿病をはじめ、衛生状態も悪かった。こうした状況を改善するため、井上さんは疾病予防の重要性を訴えたが、チームに聞き入れてもらえなかった。そこで自ら、手洗いや食生活の指導を始めた。識字率の低い地域では絵に描いて説明して…。はじめは知らん顔だったスタッフも、徐々に関心をもつようになり、井上さんが帰国した後も住民への

指導は継続されている。「技術の伝達に必要なのは、ニーズの把握や専門性の訴求はもちろん、「この人の言うことなら聞いてみよう」と思ってもらえる信頼関係の構築でした」。



井上さんを含む、医師、看護師、歯科医師などのスタッフからなる11名の巡回医療チーム。



井上さんの帰国後も、巡回医療チームのスタッフが乳がん検診指導の活動を引き継いでくれている。



小学校を借りて、ウイルス感染と寄生虫について教えるミニ講座も開いた。



集落を訪ね、住民の血圧測定をする井上さん。

青年海外協力隊を目指すみなさんへ


仕事の経験を積んで、そして 趣味を持って参加するといい。

学校を卒業後すぐに協力隊に参加したとしても、赴任先でできることは少ないと思います。協力隊の活動は現場。仕事の経験を積んでから挑むほうがいいでしょう。何かしようとする時に1つでも引き出しが多いほうが、対応できる幅が広がるからです。それから、趣味もあるといいですね。私はマラソンと書道。交流のきっかけになりました。

2020年東京パラリンピックに向け 障がい者水泳選手の道筋をつくる。



MASATO SAKAI
MASATO SAKAI

赴任地
 中華人民共和国
 赴任地での職種(活動分野)
日本語教師
 兵庫県神戸市
 一般社団法人日本身体障がい者水泳連盟
 アスリートパスウェイ・コーディネーター
 大学卒業後、サントリー(株)に入社、その後通信課程で
 教員免許をとり、神戸市の小学校教員に。その間、中国・
 上海で日本人学校派遣教員を務め、中国・天津で青年海外
 協力隊に現職参加。帰国後、現場復帰した後、23年間
 務めた教員を退職し、日本人学校で国際交流を推進する
 国際交流ディレクターを務める。その後、非常勤教員の傍ら、
 北京・ロンドンパラリンピック水泳日本代表チームのコーチ
 兼通訳を務め、シニア海外ボランティアでミャンマーへ。
 2016年、リオパラリンピック水泳競技のNHK解説者に。
 同年8月、一般社団法人日本身体障がい者水泳連盟の
 アスリートパスウェイ・コーディネーターに就任。

好きな水泳、教育者、国際経験が功を成す。

2016年9月、リオパラリンピック会場から映し出される雄姿に感動し、
 応援した人も多いだろう。選手たちは肢体が不自由ながらも走る、
 跳ぶ、投げる、そして泳ぐ。2020年の東京パラリンピックに向けて、日本
 でも準備が始まった。水泳におけるプロジェクトとして、選手の育成、
 コーチやトレーナーの養成、選手予備軍の発掘など、日本選手の
 メダル獲得を目指してアスリートパスウェイ(道すじ)を作る、それが
 コーディネーター酒井正人さんの仕事だ。一般社団法人日本身体
 障がい者水泳連盟に所属し、多岐にわたる業務に取り組んでいる。

「学生時代から続けている水泳、国際交流と通訳、そして、人に教える
 こと。自分のやりたいこの3つが濃縮されたような仕事にやりがいを感じて
 います」と酒井さんは笑顔を見せる。

酒井さんは、神戸市の教員時代に青年海外協力隊に応募し、
 中国・天津で活動した。現地のビジネスマンや大学教授、公務員など
 に日本語を教えるのが任務だった。「当時の中国はまだ発展途上の
 真っ只中。『日本ってどんな国?』とよく尋ねられ、異文化の中に身を
 投じて初めて、日本固有の文化を考えるようになりました」。



酒井さんの予定はぎっしり。
 会議や打合せ、視察、事務作業などをこなしていく。



障がいも年齢もさまざまなスイマーに、
 コーチのボランティアもする酒井さん。

代表チームのサポートで出会った 障がい者スポーツ支援の道。



その後、非常勤教員をしていた時、酒井さんに北京パラリンピック水泳日本代表チームの
 コーチ兼通訳をしてほしいかと声がかかる。中国語と英語、さらに水泳指導のキャリアを
 見込まれたことだった。ここで初めて障がい者水泳と出会う。

「いろんな意味で固定観念が覆されました。印象的だったのが、北京大会の慰労会
 の席のこと。メダリストがビールを注いでくれるのですが、彼には手がなかった。あいさつ
 だけかなと思った瞬間、すっと出した足の指を使って、瓶からグラスに見事にビールを注いで
 くれました。あまりにも自然な姿で、彼に障がいがあるということを忘れるほどでした」。

心のバリアをなくし 自分の意思で人生を拓く。

2013年、酒井さんは、シニア海外ボランティアでミャンマーへ行き、パラリンピック水泳
 ナショナルチームの指導にあたった。輝かしいキャリアと思われるが、順風満帆ではなかった
 と酒井さんは言う。「私は自分が弱いことを知っているから、常に目の前に具体的目標を
 掲げて挑んできました。人として生まれたからには自分の意思で歩く、何をして生きるかは
 自分次第です。何か目標に向かって歩んでいる時、人は輝く。人生、好きなことをしたもん
 勝ちですよ」。その言葉通り、酒井さんは輝いている。



同僚に
 聞く!

一般社団法人日本身体障がい者水泳連盟アスリートパスウェイ・総務経理 **渡邊 文夫**さん
 酒井さんは明るいですね、彼は相手がどんな人であれ、区別をしたり一線を
 引いたりすることなく付き合えることができる。やはり、ご自身がスポーツマンとい
 うのもあるのでしょう。そして、どんなことにもポジティブシンキング。彼なら、この仕事
 を達成するでしょうし、これからも世界に飛び出していきましょう。

大切なのは活動後。 その経験を糧に次で生かす。

「協力隊の活動には使命があります。現地
 のニーズに応えた技術移転、知識の伝達、
 自主自立。もちろん、私もこれらに沿った活動
 をしましたが、振り返ると自分自身に新たな
 価値が芽生え、生き方を再確認し、新たな
 夢を発見するのに大いに役立ちました」と
 酒井さんは話す。活動後に勤務した神戸
 市立神陵台小学校では、中国をはじめとした
 外国人児童のクラスを担当したが、差別も
 あり、台湾と中国の児童が両国の関係に
 ついて言い争いになることも。小さな子ども
 たちが自分のルーツでぶつかることは、日本人
 のクラスではあまりないだろう。そんな人種
 のるつぼのようなクラスでも、酒井さんが子ども
 たちと向き合えたのは、協力隊での経験が

あったから。「協力隊の活動を決して『貴重
 な経験だった…』なんて終わらせてはいけま
 せん。その経験を生かし、社会に貢献できる
 活動へと結び付けなければならないと思って
 います」と力を込めて話す。



天津の教え子たちとの忘年会。
 小学校の教室を借りて、歌や日本語の発表をした。



当時の詳細は著書にまとめられている。



教え子たちが開いてくれた酒井さんのお別れ会。
 約20年前の中国は、
 今よりもゆったりと時が流れていたそうだ。

青年海外協力隊を目指すみなさんへ

「活動したい」という志と 明確な目標設定を忘れずに。

これから活動する人にぜひ実行してもらいたい
 のが、赴任前にきちんと目標を立てること。周囲に
 流されそうな時でも、目標があれば自分の意思を
 確認できます。たとえ達成できなかったとしても、
 その過程が大事。そうすれば、帰国してからもつな
 ぎのある行動がとれるでしょう。でないと、2年間なんて、
 あっという間に終わってしまいますよ!

外国人選手が活躍できるように 言葉はもちろん、心も支える。



協力隊で培った経験を生かし 外国人選手的心情を尊重する。

橘さんは大学時代、全米の野球選手権大会にスタッフとして参加し、世界で活躍する日本人を知ったそうだ。自身も世界で活動したいと、卒業後はすぐに青年海外協力隊に参加。コロンビアでの野球指導だ。「最初は、礼儀などを重んじる日本の野球を教えようと試みましたが、途中で、子どもたちが求めているのは“少し”違うと気づきました。コロンビアのやり方、日本のやり方のどちらの良いいところをとった新しい野球の指導を求められていたのだと思います。以来、まずは相手が求めるものは何かと考えるようになりました」。そして、ラテンアメリカならではの時間や物事にゆるやかな感覚も実感。こうした経験が今、外国人選手の立場や心情を慮って、サポートすることにつながっている。



マルコス・マテオ投手のヒーローインタビューで通訳をする橘さん。

野球から学んだことは多い。 日本と世界の架け橋になりたい。

日本のプロ野球にも外国人選手がいるとはいえ、世界のなかで日本のリーグはまだマイナーかもしれない。「縁があって来日した外国人選手に、日本に来て良かったと感じてもらいたい。そして、『メジャーもいいけれど、日本のリーグもいい』そんな風に思ってもらえたら」と橘さん。

小さい頃からずっと野球を続けてきた橘さんは、野球が大好き。野球を通して、挨拶、コミュニケーションなど数多くのことを学んできた。そこに、海外での活動により広い視野も加わった。「これからは、野球を通して社会に、日本に恩返しをしていきたい」と、思いを語る橘さん。日本と日本の野球を世界に発信していくたくましい姿がここにある。



外国人選手の生活面もサポート。スペイン語が通じない美容院に予約を入れ、選手が希望するカットやパーマについて事前に伝える。



先輩に
聞く!

株式会社阪神タイガース 球団本部 チーム運営 通訳
大木 一仁さん(右)、栗山 正貴さん(左)

球団に所属する外国人選手たちが、いかにストレスなくプレーに集中してもらうか。そのために、我々3名の通訳がチームで対応します。橘君は外国人選手たちの気持ちを理解して、すぐに仲良くなれます。異国で暮らした協力隊の経験があるからなのでしょう。プロ野球界のトレンドとして中南米の選手が増えているので、彼の活躍が期待されています。

橘 佳祐
KEISUKE TACHIBANA

赴任地
コロンビア

赴任地での職種(活動分野)
野球指導

兵庫県西宮市
株式会社阪神タイガース
球団本部 チーム運営 通訳

日本体育大学在学中に全米の野球選手権大会に参加した経験から、海外での活動に関心をもつ。卒業後すぐに青年海外協力隊で活動。2013年帰国、東日本大震災の復興業務に従事する。2014年岐阜市の中学校(保健体育)、2015年京都市の特別支援学校で常勤講師として勤務。2016年1月より株式会社阪神タイガースのスペイン語通訳となる。

大切なのは、選手が気持ちよくプレーできる環境づくり。

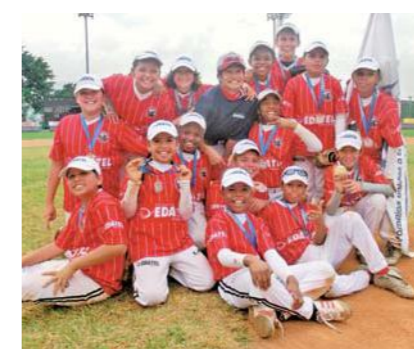
日本のプロ野球を代表する球団、阪神タイガース。甲子園球場を中心に繰り広げられる試合では、多くのファンが声援を送る。選手のなかには、アメリカや中南米など地球の裏側から来日したプロもいる。外国人選手が力を発揮できるよう、言葉をつなぎ、陰ながら支えているのが、球団の通訳である橘 佳祐さんの仕事だ。現在はドミニカ共和国から来日した選手たちの通訳を担う。「選手たちは、野球についてはプロですが、日本は異国の地。母国語でなければ伝えられない言葉やニュアンスもあると思います」と橘さんは外国人選手の気持ちに寄り添う。

橘さんは、外国人選手たちにミーティングの内容をスペイン語で伝え、練習中にはキャッチボールやトレーニングのサポートも務める。公の場では、入団時の記者会見にはじまり、外国人投手に交代を告げる際にはコーチとともにマウンドに上がり、試合後のヒーローインタビューにも対応。遠征にも同行し、同伴する家族の相談にもなる。「外国人選手が野球に集中できるよう、生活面も含めてケアをします。通訳というより、マネージャーに近い仕事ですね」と説明する。常に、外国人選手とのそばにいます。「情も生まれてきます」と爽やかな笑顔を見せる。

片言でもいい、まず思いを伝える。 言葉の壁を破るのは自分だ。

赴任先のコロンビアで、橘さんはカリ県の野球連盟に所属し、クラブチームなどで子どもたちに野球を教えていた。現地は湿度が低くて暮らしやすく、人々も協力的だったというところが、「指導して欲しい」との要望はあるものの具体的なプランがなく、橘さんはどう活動を進めていいか悩んだそうだ。片言のスペイン語では本質的なことが伝えられない。一時は、話しても無駄だと消極的になったこともあるが、思い切って「話をしたい」と野球連盟のスタッフに申し出たそうだ。すると、「つたないスペイン語にみんなが耳を傾けてくれました。言葉に詰まると、『ケイ(橘さん)の言いたいことはこういうことだろう?』とフォローもしてくれたのです」。人々は、橘さんの考えていることを

理解してくれたのだ。異国の地であっても、言葉に出して伝えることの重要性を学んだ。その後、スペイン語を猛特訓したそうだ。「自ら行動することの大切さを痛感しました」。



遠征先にて優勝したクラブチームの子どもたちと。



野球指導の前に、まずは掃除からスタート。



毎日続けていると少しずつ理解してくれる子どもが増え、練習前に自主的に掃除をやるようになっていった。

青年海外協力隊を目指すみなさんへ

世界を知ること、それは新しい自分に出会うこと。

世界を肌で感じた時、自分の小ささを知りました。もがき苦しみ、異国での活動を終え、帰ってきた時、日本にいるのはきっと今までは違う自分だと思えます。

私にとって協力隊とは、新たな出会い(場所、人、自分)を得られる場所でした。

皆さんもぜひ、新しい自分に出会ってください!

青年海外協力隊

検索

<http://www.jica.go.jp/volunteer>

独立行政法人 国際協力機構(JICA) 関西国際センター

〒651-0073 兵庫県神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2

Tel:078-261-0341(代) Fax:078-261-0357

